

# 見 拝 顔 素

口腔健康科学講座・  
加齢高齢者歯科学分野

助教授 魚 島 勝 美

はじめまして。昨年（平成13年）11月より本学加齢・高齢者歯科学分野に助教授としてお世話になっている魚島勝美と申します。私は東京生まれ（正確には埼玉県の病院生まれらしいですが）の東京育ちなもので、ここ新潟での生活は初めての東京以外の暮らしです。新潟に赴任する事になって、東京では多くの人に声をかけられました。「実は私は新潟出身なんですよ」とか、「私もしばらく新潟で暮らしていたんですよ」という方が非常に多かったのが印象的です。新潟が歯科関係（技工士さんも含めて）、医科関係（看護婦さんも含めて）の人材をいかにたくさん東京に送り出しているかを実感する経験でした。その時に皆がにこにこしながら口をそろえて「新潟はいいですよお。」と言うのです。「食べ物おいしいし、人は良いし…」と。そしてまた、その後ほとんど例外無く言うのです。「でも、天気がねえ…」と。そういう時には、いかにもかわいそうな人を見る眼差しになるのが気にはなっていたのですが…。今、あの眼差しの意味を深く実感しているところであります。

初めての東京以外の生活と書きましたが、実はこの年にして初めての一人暮らしでもあります。家族は東京（正確には千葉）なのです。おじさんの初めての一人暮らしは結構悲惨です。現在小金町の官舎に入居させてもらっておりますが、これがまた、雪女と一緒に住んでいるのかと思うくらい部屋の中が寒い！先日、冬にしては暖かい日が少し続いたのですが、この時、私は窓ガラスの外側が曇るという経験を初めてさせていただきました。朝ふとんの中で吐く息が白いのも久々の経験だなあ…。さらに、この建物が少し高台にあって、しかも私の部屋が4階にあるため、ただでさえ風が強いといわれる新潟の中でもことさらに風



が強い！もう、毎日が大型台風直撃状態です。隙間があいていて直接風が吹き込む風呂場なんぞは、さながら真冬の北国の露天風呂状態です。そんな状況の中で、ご飯を炊いてひたすらレトルトのカレーを食らうおじさんがひとり。時には風呂を沸かしているのを忘れて沸騰させ、ある時は次第に部屋に降り積もるほこりを見て途方に暮れ、久々に使った洗濯機の洗濯槽の裏に隠れていたカビ達によって、余計に汚れてしまった洗濯物の前に立ち尽くし、そしてまた、ノーマルタイヤで雪の駐車場を出ようとして1mも進まずに立ち往生する。ロマンだなあ…。ちなみに、官舎が嫌だとかいかんといっているわけでは決してありませんので、誤解のありませんように。入居させて頂いて本当に官舎しております。と、寒いおやじギャグを一発かましたところで、少しまじめに私の自己紹介をさせていただきます。私は昭和60年に東京医科歯科大学歯学部を卒業いたしまして、すぐに第2補綴（Cr-Br）の大学院に入学させていただきました。当時の教授は、奇しくも新大第2補綴の初代教授でいらした田端恒雄先生でした。この大学院時代、ハイドロキシアパタイトのインプラントに関する動物実験を通して研究をし、学位をいただきました。朝から晩までインプラントの事を考えていた時代です。大学院修了の2ヶ月後に東大の口腔外科に助手として赴任しないかというお話をいただき、当時埼玉医科大学の形成外科より赴任したばかりの赤川先生のご指導の下、

東大口外の再建に参加させていただいたのです。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、当時の東大口外は17年の長きにわたり教授が不在だったこともあり、かなりひどい状態でした。週刊誌ネタにもなりました。これは涙なしでは語れないほどです。とは言うものの、私は一般歯科治療に携わる一方、入院患者さんの担当として口腔外科的なおペにも参加させて頂いたり、当直のローテーションにも入ったりと（マンパワーが不足していましたので）、かなり色々と勉強になりました。と同時に今までの私のキャリアの中でも最も忙しく、厳しい時代でもありました。今ではあんなに仕事はできません。そんな生活を3年間続けた後、アメリカのNIHに留学をする機会を得ました。この時には結婚しておりましたので、女房も一緒に嬉々としてアメリカに飛んだわけです。ちなみに女房も歯医者で、医科歯科の同級生です。NIHで1年間過ごした後、たまたまノースカロライナ大学の歯学部に行かないかという話がありまして、これまた女房共々ノースカロライナ大に移ったのです。私は補綴出身ですが、アメリカではhsp 27というストレス蛋白の遺伝子発現制御に関する研究をしていました。そしてそこで2年間の充実した日々を過ごした後、日本に帰って来ました。【ここで、若い先生方に一言。もし、留学する機会が得られるのなら、何と少しでも留学することをお勧めします。何物にも代え難い素晴らしい経験ができると思います。そして、もし留学しようと思いでしたら、この後はお読みにならない方が良くも…。】ところが、助手を限度いっぱい3年間休職した私には、その間に赤川教授がご退官になった事もあり、戻るところがありませんでした。私の不徳の致すところであります。でも、よくある事です。仕方が無いのでバイト生活を続け、諸先輩に泣き付いてご迷惑をかける一方、大学時代の同級生で現在は医科歯科でバリバリの研究をしている一條教授が当時在籍していた癌研の宮園先生のラボに居候させて頂いておりました。一方女房は私と違ってすんなり医科歯科の助手に復帰しておりましたので（ペリオの石川先生のところですが）、髪結いの亭主状態です。その後、東京通信病院の歯科口腔外科への10

ヶ月の勤務を経て、帰国以来2年後にやっと、東京医科歯科大学の古巣、第2補綴に助手として復帰する事ができました。当時の教授、長谷川先生には非常に感謝しております。さらに、ここで3年間色々な悪あがきをしつつ、「教官はかくあるべし」などという偉そうな事をほざいておりました結果、それが医科歯科歯学部で学部長江藤先生の逆鱗に触れ、「そんな偉そうな事言うのなら自分でなんとかしろ」ということに相成った次第でございます。そして平成12年より、大学院の重点化に伴ってできた「医歯総合教育開発学分野」というところにお世話になって教育の事も考え始めた矢先、昨年すなわち平成13年11月より、新潟大学歯学部にお世話になる事になったのです。この辺の経緯に関しては江藤先生に大変お世話になり感謝しております。さあ、そろそろ長くなって退屈になって参りました。本題に入ります。ごめんなさい。

いかがでしょうか？ 正直申しまして、私自身も「私はいったい何ナノ？」状態です。ただ、少なくとも活動の場を臨床の、しかもCr-Brに決めた以上、私が今後やりたい事は以下の通りです。まず、従来の補綴学に少しでも生物学的な基礎の風を入れられたらと思っております。歯科が人間を相手にする学問である以上、いかなる歯科的な処置も、その結果として患者さんの身体に生物学的な反応を何らかの形で惹起するはずで、ですから、従来の補綴学的なアプローチ方法に加えて、この、補綴処置に伴って起こるはずの生物学的な変化を捉える事で、補綴学、歯科医学の発展に少しでも寄与できれば良いと思っております。具体的には本稿では述べませんが、発想を変えればまだまだわからない事はたくさんあると考えています。

さらに、医科歯科で少し携わった歯科医学教育の未来についても、いかに優秀な臨床歯科医を育てられるか、優秀な歯科医学研究者を育てられるかという観点から、なにかお手伝いできる事があれば幸いです。

色々書かせて頂きましたが、実は私、ここ新潟を結構気に入っております。元来人込みが大嫌いで、いつもみんながいらしている東京はあま

り好きになれません。今では週末に東京駅に降り立つと、その人込みに圧倒されてしまいます。また、日本の大学は東京医科歯科大学歯学部しか知らなかった私にとって、新潟大学歯学部は極めて新鮮で、人、システムを含めて素晴らしいと思っております。こういった環境で仕事をさせて頂ける以上、自分のできる限りの事はしたいと思っておりますし、それが少しでも新大歯学部のお役にたてるよう、微力ながら努力したいと思っておりますので、皆様、何卒よろしくお願い申し上げます。

✧



歯学部附属病院・  
総合診療部

講師 小林 哲夫

E-mail address : kotetsuo@dent.niigata-u.ac.jp

平成13年11月1日付けで、歯学部附属病院講師として総合診療部に配属されました小林と申します。本歯学部附属病院での卒業研修医の制度は私ども17期生の卒業後に導入されたもので、思いがけなくも当時、研修医第一期生となっただけさつがあります。それから15年後に研修医指導を担当する機会を賜ったことは何か不思議な巡り合わせを感じます。

出身は本県栃尾市で上杉謙信旗揚げの地です。ちょうど小学生の時にNHK大河ドラマで「天と地と」が放映され、石坂浩二扮する謙信に強い影響を受けたことを覚えております。趣味・特技は特にこれといったものはありませんが、スポーツ全般が（やるのも、見るのも）好きで、学生時代はバスケット部や陸上部（短距離）に所属していました。

昭和62年に本学歯学部を卒業後、歯科保存学第二講座（現在：摂食環境制御学講座歯周診断・再建学分野）に入局し、歯周病学の臨床・教育・研究に携わってまいりました。入局理由としては、同講座が治療学のみでなく歯周病という一疾病の

病因・治療学双方を対象としており、やりがいを持ってそうだったからです。入局当時は、とにかく臨床技術を一日でも早く身につけようと（早く一人前になろうと）毎日が必死だったように思えます。

平成元年からは助手として臨床実習も担当するようになりました。幸いなことに、当時既にケースリーダー制分散実習が発足されており、円滑な診療参加型実習を進めることができました。また同実習は課題解決型システムの一面もあったため、学生と一緒に勉強しながら臨床知識の量と質を高めることができました。総合診療部担当教官として今後の研修医指導にあたっては、このような経験を活かしていきたいと思っております。研究面では入局1年目から歯周病活動度診断プロジェクトの一環として嫌気性菌の嫌気培養・同定のお手伝いをさせていただくことができ、歯周病の病因論的興味が一層湧いてきたことを記憶しております。その後は、多くの歯周病患者を診療しているうちに歯周病の発症・進行・再発の個人差に強い興味を覚えるようになり、感受性診断の研究に没頭するようになりました。その1つとして平成8年に「Fc受容体遺伝子多型と歯周病感受性」のプロジェクトを始めました。翌年には幸運にも同プロジェクトのパートナーであるオランダ・ユトレヒト大学医学部免疫学講座に日本学術振興会特定国派遣研究員として出張・研修する機会に恵まれました。すばらしいスタッフのおかげで多くのことを学ぶことができ、プロジェクトも順調に進めることができました。これからは単に診断だけでなく、歯周病原菌駆除を目指した抗体療法の開発も進めていければと考えております。

今後は総合診療部教官として臨床・教育・研究に全力を尽くしたいと思っております。皆様からの御指導と御協力を心よりお願い申し上げまして自己紹介の挨拶とさせていただきます。

✧



摂食環境制御学講座・  
顎顔面解剖学分野

助教授 網塚 憲 生

平成14年1月1日をもちまして、顎顔面解剖学分野の助教授として就任しました網塚です。すでに教室に来てから1ヶ月弱（執筆時）経ちましたが、今まで研究してきました骨・軟骨の細胞生物学を持続すること、いや、むしろそれを積極的に教室で生かしてほしい、との前田健康教授のご意向があり、有り難く拝受させていただいております。また、私の移動に伴って何人かの先生および大学院生もこちらの教室にお世話になることになりました。私が顎顔面解剖学に来て最初にやらねばならなかったことは助教授室への引っ越しでしたが、これも前田教授のご高配で大変居心地の良い部屋となっています。実験試薬などの引っ越しが遅れておりますが、私がこちらに来て間もなく当教室に配属されている大学院生と一緒に仕事をすることを戴き、すでに研究をはじめています。私の研究紹介をしますと、昭和63年に口腔解剖学第一講座（現在の硬組織形態学分野）の小澤英浩教授の大学院生として入局し、「活性型ビタミンD受容体の核内移行」で学位を授与させて戴きました。大学院4年間で行った仕事は4つあり、それを通して小澤先生からは形態学や細胞生物学的手法を、また短期間ですが腎研究所の山本先生からはin situ hybridizationなどを学ばせていただきました。大学院を修了すると間もなく、カナダ、モントリオールのMcGill大学カルシウム研究所に留学し、世界の骨代謝研究でも大きなラボを構えているDavid Goltzman教授のもとで仕事をすることとなりました。Goltzman先生は英国紳士を思わせるgentleな方であり、関連病院を含めたMcGill大学のPhysician in Chiefをされています。実は、この留学が私の初めての海外旅行であり、たどたどしい英語で一生懸命だった記憶があります。私が留学して最初に行った仕事は、副甲状腺ホルモン関連ペプチド

(PTHrP) やその受容体の研究でした。その努力の甲斐あって、研究成果をJ Cell BiolやMol Cell Biolなどに掲載することができて嬉しかった反面、競合相手が強大なMassachusetts General Hospitalのグループであり、1994年の年明けにラジオが「A Happy, Healthy, New Year !!」と告げるのを聞きながら時間を惜しんで研究したことも、また、そのときの窓の外には雪が降り積もっていたことも、今のこのように蘇ってきます。帰国後は、従来の骨の研究に加えて軟骨・軟骨内骨化の研究も行うようになり、助手の立場でしたが、何人かの大学院生とも一緒に研究をしながら、J Clin Invest, Proc. Natl. Acad. Sci., USAといった雑誌に成果を発表することが出来ました。この頃から、海外・国内の様々な先生との共同研究も多くなってきたように覚えております。今回、前田教授のご厚意で顎顔面解剖学の助教授として迎え入れて戴いた上、前田教授およびスタッフの皆さんには大変良くしてもらっており感謝の念が耐えません。前田先生は人を引きつける魅力があり、教室には多くの人が集まります。教室の大学院生が、土日も当然のことながら、夜の2時、3時まで仕事をしている光景をしばしば見かけます。大学院生の諸君が自分の所見について意見を求めるために深夜でも助教授室に訪れ、また、ラボで切片を見ながら、あるいは一緒に研究を行うといった、ちょうど、私が数年前にモントリオールから帰ってきた当時の活気がここにあり、私としては本当に嬉しい限りです。現在、私自身はFGFR3のpoint mutationで発症する軟骨無形成症、Cephalopolysynductily syndromeに見られる多指症、血管内皮増殖因子(VEGF)などを中心に仕事をしておりますが、一方で、当教室には神経の細胞組織学、顎関節、インプラントなどバラエティーに富んだ研究プロジェクトとそれら研究所見の膨大な蓄積があり、今後、様々な分野から網羅的に研究を進めることの重要性、また、今まで蓄積したデータを臨床に応用してゆくといい実用化についても積極的に取り組んで行きたいと思っております。最後になりましたが、新しい教室に来て間もないにもかかわらず

ず、前田教授、河野助手、井上助手、竹内さん、星野さん、大学院生の諸君をはじめ、多くの人達の温かな気持ちに改めて感謝の意を表したいと思います。また、当教室の先生方のお役にたてるよう努力するばかりでなく、新潟大学大学院医歯学総合研究科・新潟大学歯学部のために力を尽くして参りたいと思います。今後とも、よろしくおねがいいたします。

＊



口腔健康科学講座・  
口腔保健推進学分野  
助教授 葭原明弘

卒業して14年がたちました。この間、大学人として、研究、臨床、教育そして、地域歯科保健活動と、結構バランスが取れていたのではないかと思います。

ここ10年間で歯科会も色々な面で大きく変わってきましたし、現在もそれは進行中です。その中で、自分の置かれている状況を考えると、力は小さいのですが、その変化にいくらか関与してこれたのではないかという実感があります。

現在、私達は、医療を取りまく環境の急激な変化に、ともすれば戸惑いを感じることがあります。たとえば、膨大な財政赤字、医療の細分化、出来高払い制による医療保健制度の見直し、歯科医師増加の問題、疾病構造の変化など、取り上げれば際限なく続くでしょう。このような状況の中で私達が進むべき道を考えるにあたり、再度原点に立ってあるべき姿について考えてみる必要があるように思います。

「大学の本来の役割は？」という問いに対しては、国民のQOLを重視した口腔医療の充実のため、人間性豊かな患者本位の立場に立てる医療人の育成、および歯学の発展と高度化に先導的な役割を果たし得る国際的な研究者の育成にある、と考えています。その際、再確認しておかなければならないことは、われわれを最終的に評価するの

は社会であるという点です。したがって、社会における大学の位置付けを明確にし、研究活動等により得られた成果を積極的に社会に反映し、地域社会の発展に貢献していかなければならないと考えています。

あまり、素顔拝見にふさわしくない内容になったかも知れません。まあ、とにかく、私は「世のため、人のため」という、一見ばたくさいフレーズを心の糧にしています。

「これからは予防歯科の時代がくる」な～んて一人で考えている今日この頃です。今後とも宜しくお願いいたします。

＊



口腔健康科学講座・  
口腔保健推進学分野  
助手 山賀孝之

先日、この「素顔拝見」の原稿依頼を受けました。学生の頃から歯学部ニュース、そして「素顔拝見」は時々目にしていましたが、ずっと上の先生が書くものだと思っていましたし、「はて、自分もそういう年になったのかな？」と懐古してもみましたが、違和感は否めません。しかし、細かいことをあれこれ考えるのは生来嫌いなので、とりあえず深く考えずに稿を進めることにします。

生まれは新潟市です。親の転勤の都合で各地を転々としましたが最終的にはここ新潟へ落ち着き、一年間の浪人生活を経て新潟大学歯学部へ入学しました(27期)。卒業後は予防歯科学講座(現口腔健康科学講座)へ入局し、気づくと4年間の大学院も無事(?)修了して果ては三十路の大台に乗っかっていました。現在、家族は恋人(戸籍上は新妻)が一人です。

学部時代の思い出といえば、軽音楽部でのバンド活動が挙げられます。BOOWYなどのバンドブームをリアルタイムで体感した世代で楽器というものよりむしろロックバンドというスタイルに興味があったことと、体育会系の小難しい上下関

係が大嫌いであったことも手伝って、このクラブは非常に水が合っていました。楽器はベースを選びました。「なんといっても、あの重低音に惹かれた」と言いたいところですが、誰もやり手がなさそうだったという単純な理由です。学1の時に一つ上の先輩が中心となったヘビメタバンドを新たに組むという構想に乗ったため、清水の舞台から飛び降りたつもりで数十万円のベースを二本も購入し、ライブハウスや歯学祭などで大活躍してくれましたが、現在の我が愛器は手垢と緑錆にまみれ、すっかり部屋のオブジェと化してしまいました。

大学院時代は、「口腔保健と全身的な健康状態に関する研究」(通称8020データバンク)と口臭外来に関わらせていただいたことが印象的です。前者は当教室の基幹プロジェクトのひとつであり、高齢者を対象とした大規模な疫学調査です。この調査は現在も進行中の縦断調査(10年間継続)であり、今後の結果が楽しみです。また、口臭外来は開設当初から関わらせていただき、右も左もわからない状態からのスタートでしたが、宮崎教授をはじめ学内外問わず各方面からのご指導を賜り、なんとか順調に稼働しております。特に分析機器を臨床の場で安定して動かすために試行錯誤の連続だったことは、今でも鮮明に記憶の中に残っています。

最後に、私はいつも無表情で無愛想な顔をしているので、よく「冷酷」とか「こわい」などと誤解されるのですが外見と中身は一致しないことを付け加えておきます。

\*

## “起爆剤”



口腔健康科学講座・  
口腔保健推進学分野

助手 小川 祐 司

新潟に来て6年目を迎えようとしています。す

っかりこちらの生活に馴染みましたが、もともとは生まれ・育ちが東京で、実家は慶応大学のすぐ近くにいます。幼小から高校まで暁星学園で学んだ私は、男子校という一種特有の空間に十数年も身をおいていました。フランス人が創立したミッションスクールですので、宗教やフランス語といった授業が必修であり、行事のときは君が代とともにラ・マルセイエーズも歌っていました。しかしその分、一般教養的なことから(裁縫の仕方・料理の作り方・女の子との話し方…)は置き去りとなり、これがのちのち色々な面で苦勞することになるうとは知る余地もありませんでした。そんな世間知らずの“温室育ち”も大学進路では随分悩み、自分の将来をあれこれイメージしましたが、結果的には歯科医の息子ということで歯学部に進むかたちになりました。ちょうどバブル最盛のころで、文系に進んだ友人達はかなり楽しい思いをしていましたが、こちらは地道に大学に通い、いつしか典型的「歯学部生」へと変わっていったのでした。

臨床実習で院内生活も始まり、歯学部生活も終盤にさしかかったころ、ひとつの転機が私におとすれました。Asian Pacific Dental Student Association Congress (APDSA)が東京で開催されることになり、当時学生会長を務めていた私は日本大学松戸歯学部の代表として参加することになったのです。コミュニケーションをとるのもおぼつかなかった私にとっては無我夢中の一語でしたが、それと同時に“起爆剤”を与えられたような感じでありました。各国から参加している歯学部生のインテリジェントでかつスマートな姿、そして何よりも歯学部生であることを誇りにしている姿勢に、学部生活を受動的にしか過ごしていなかった私は大きな衝撃を受けました。それは自分の価値観をも覆す意味をもちました。以来私の想いは強く海外に向くようになり、卒業後はオーストラリア・シドニー大学歯学部へ留学することになったのです。そして修士課程を履修しながら、肌でグローバルイゼーションを感じるようになりました。

昨年2001年、新潟大学での博士課程が修了しました。長きにわたった学生生活から離れて助手に

なり、立場も変わりました。自分を取り巻く環境も日々刻々と変化しつつあります。歯科医としての人生はまだ始まったばかりですが、いまでもあのときの“起爆剤”は私にとっての原動力であります。これまでの歩んで来られた道と経験を大切にしながら、さらに新たな“起爆剤”が発見できるよう、これからの時代を進んでいきたいと思えます。

＊

顎顔面再建学講座・  
組織再建口腔外科学分野

助手 小野 由起子

最近の目標のひとつは「ものを捨てること」である。ハリー・ポッターの映画を観たあと、原作を読もうか読むまいか迷いながら本屋をうろろろしていたとき、ふと『「捨てる！」技術』という本が目飛び込んできた。

普段からものを片づけることはあまり苦にならず、掃除はあまり好きではないので本当にきれいかどうかは別にして、見た目きれいな空間を保つことは得意な方だと自負している。それが近ごろ本棚や引き出しに入りきらないものが目につくところに置かれるようになり、どうも雑然として気に入らない。ただ雑然としているのなら精神衛生上よくないだけだが、どこになにがあるのか把握しきれず目当てのものを探さすのが困難になってきた。いつもなら収納法が特集されている雑誌などに目がいくところだが、なぜかこの本との出会いに運命を感じ、ハリー・ポッターのことはすっかり忘れてすぐに買い求めた。

ものがあふれるほど増えてしまうのはなぜか。最大の理由は捨てられないことである。捨てられないということは、私の場合必ずしもものを大事にしているというわけではない。とりあえずなんでもかんでもしまっておくのは、いるいらぬの判断を後回しにできて楽だからである。そのうえ、気に入った空き缶や紙袋などを収集するくせがあり、みずから不要なものをせっせと貯めこんでいたのだ。

ものを捨てるには大変な努力がいるし頭も使

う。必要なものとそうでないものを分別するのはそれだけでもくたびれ果てる作業なのに、押入の奥から昔の本や雑誌、年賀状などが出てくるとそこで手が止まってしまい、時間ばかりが過ぎてゆき、最後にはもう面倒くさくなってまた今度しようということになる。

タイトルをみたときはまるでこんな自分のために書かれた本のように思えたが、中を読んでみると世の中には同じような人が五万といるらしい。これを機に『「捨てる！」技術』をぜひ習得し、環境をすっきりと整えて、気分も新たに来月から助手として仕事に励みたいと思っている。(2002年1月、筆)

＊



口腔健康科学講座・  
摂食・嚥下障害学分野

助手 竹石 英之

この度、7年間在籍した歯科補綴第2講座（現在は新しい名称になっていますが、こちらの方がわかりやすいですね。）から摂食・嚥下障害学分野に移ることになりました竹石と申します。自分自身では、ボーッとしていることが多く、またそんな風でいることも何となく好きです。こんな自分の性格が、学生時代に覚えたパチンコと妙に相性が良かったらしく、学生時代また卒業した後もパチンコにハマってしまいました。ある雑誌にパチンコ店での状況は、「群衆の中の孤独」と表現していましたが、まさにその通りです。どんなに店が混雑していて、音がうるさくても自分の世界に浸ることができるものです。そのおかげと云っては何ですが、貴重な時間となけなしの資金をかなり浪費する結果となりましたが…。このようなパチンコ店のいいカモであった私も、最近はあまり行かなくなりました。別に我慢しているわけではありません。やはり30歳を過ぎて、少しは大人になったのかなあとと思います（大人になるの遅すぎ）。

この前、行きつけのお店の主人に、「先生のストレス解消法って何だい。」と聞かれ、思わず「お酒を飲むことかなあ。」と答えてしまいました。家系（遺伝）的にお酒に強い、またそのような雰囲気も好きなので、飲みに出ることは好きです。しかし最近、記憶がなくなってしまうこともあり、その翌日は、妙な不安に陥ります。そうですね。「酒は飲んでも、酒に飲まれるな。」ですね。あと旅行とかも好きです。あまり計画を立てずにフラッと出かけてしまうことが多いです。元来、

何とかなるさと楽天的に考えてしまう傾向があり、それはそれで気楽でよいのですが、何とかならず悲惨な目にあったことも多々あります。

以上、ちょっと思いつくままに書いてみました。読まれている方には、こいつは一体何者なんだと思う方もいるかもしれません。しかし私は別に怪しい者ではありません（いや、十分怪しすぎる）。今度、会った時にでも気軽に声をかけて下さい。宜しくお願い致します。

